

菊地建至「紙上対話や学生どうしのコメントを生かすクリティカルシンキング入門」

序

●クリティカルシンキング（略 CT）の入門授業に関して我々は何をもっと良く知るべきか。本発表はこの問いをともに考える取り組みの一環である。また、下記の授業内実習は、発表者が実際に行っているものである。なぜそういう実習が重視されると良いか。その要領はどのようなものか。本発表の内容はどこでもこれらの問いを意識するが、フロア参加者を含む対話では話題をそれらに限定せず、応答する。**【以下、本資料の【 】内は、5 月 29 日に追記した】**

実習「紙上対話（ペンネーム使用）」

実習「著者の詳しい論述に複数のコメント係が CT コメントを加えるピアによる CT コメントワークと、著者によるリライトイング」

●発表者は、「CT の入門授業に関して、我々は何をもっと良く知るべきか」を考える際、「CT を学ぶひとは学校の内外でどのような CT や知とのかかわりを持って生きているか」や「どのような声が生かされると良いか」も重視する。

●これはワークショップであるから、今後の哲学教育にかかわる者どうし、「こういうのはどう？」ということや、発表者のアイデアと実践の改良への提案をどしどし出してくださることを、期待します。よろしくお願いします。

目次

序

- 1 「CT」及び「CT の入門授業」という言葉が指すもの
 - 2 CT の目的及び CT の入門授業で学ぶことの目的について
 - 3 アーギュメントに注目する CT の入門授業で重視する授業内容と実習要領
- 付録 発表者の金沢医科大学での授業計画【本資料はこれを省く】

1 「CT」及び「CTの入門授業」という言葉が指すもの

引用 a (伊勢田 (他) 編[2013], iii)

CT というのは、他人の主張を鵜呑みにすることなく、吟味し評価するための方法論である。「クリティカル」というのは、日本語に直訳すれば「批判的」ということだが、日常的にいう「批判」とは違い、相手をけなすというようなニュアンスではなく、相手の言っていることを最終的に肯定するにせよ否定するにせよ、その前に「よく吟味する」「きちんと評価する」という意味である。

引用 b (伊勢田 (他) 編[2013], v)

実は、科学的思考と呼ばれるものも、それぞれの領域に特有の要素をとりのぞいて骨組みだけを取り出すなら、一種の CT になっている。その意味では、CT を学ぶことは、科学のものの考え方の骨組みを学ぶということにもつながるのである。

引用 c (楠見 (他) 編[2011], p.3)

このように批判的思考には複数の定義がある。その中核は、批判的思考は、目標に基づいておこなわれる論理的思考であり、意識的な内省を伴う思考である。批判的思考における情報を鵜呑みにしないで判断する能力は日常生活の実践を支える能力であり、学習や学問をおこなう基礎となる能力である。
(略)

発表者は学生とのかかわりから、CT の思考の特徴を下のようにパラフレーズするようになっている。

早まることなく——「質問（疑問）があります」、「まだよくわかっていません」、「考え直しているからもう少し待ってください」、「このテーマでもう一度書き直したい」等は、CT ではプラスに働く言葉だと思っていい。そういう発言や姿勢は、相手にただ苦情を言っているのでもなければ非難や反発の表現でもない。本人の怠惰の表れでもない。クリティカルシンキングに取り組む者どうしの場ではそう受け止められる。そのような言葉は奨励されることであり、実

際に活用するとよい。クリティカルシンキング入門では、このことを理解することが重要な経験であり、重要な達成のひとつである。CTを通して、さまざまな「わからない」に落ちついて対処し、それらから目をそらすのではなく「わからない」は重要な出発点であるという心構えで実践するひとが育つだろう。

細部にもかかわって——「細かいことかもしれないけれど、そして、普段の生活の中で細かいと言われそうなことは言わないようにしてきたけれど、気になったことだから今回は自分用にメモし、他のひとにも伝えようと思います」、「細かいことが気になっているのかもしれないけれど、語り手・著者や聞くひとがこの言葉をどういう意味で使っているか、質問したい」、「このアーギュメント（結論・根拠・推論）についてまだそれが確かなことだと言うには早いと思うから、判断や行動決定を進めるのはもう少し待ってください」、「細かいことかもしれないけれど、自分自身や親しいひととの関係について変化を感じるから、耳を澄まさせています」等は、CTではプラスに働く言葉だと思っていい。そして、「細部にもかかわって」問い考えることは、「早まることなく」問い考えることと通じるものである。

複数の視点で、批判的に——「この視点で正しいと思えても、別な視点からの考察や吟味を試すことは有意義なこと、かつ、許されるべきことでしょう」、「疑問を呈することも根拠や異論を検討することもなく、ただ権威に従うことや同調することがいつも正しいとしないでよいはずです」等は、CTではプラスに働く言葉だと思っていい。たしかに複数人集まっても視点がひとつであることや批判が許されないことは生じるが、それぞれのひとが本気で問い発言できる環境であれば、語りや思考をともにする他者との経験は「複数の視点で、批判的に」問い考える取り組みへの道を開くだろう。そして、そのように問い考えることが、早まることなく、細部にもかかわって吟味する思考を実行し、持続することによって、強力な支えにもなるのである。

+ある主題についてのCTというだけでなく、自分（たち）がどのような考えるプロセスにいるかを考えること【これを「メタCT」と言うこともできるだろう】

+「開く（緩める）」思考と「根拠を持って絞る」思考

+CT を実行することに伴う不安・恐れ・気の進まなさや喜び、CT を実行する環境と CT の関係、これらについて率直に語り合い、考えること【これに CT し
ないほうが良い状況の考察等も合わせ、「メタ CT」と言うこともできるだろう】

それでは、なぜ、このような CT の意味や一見冗長な解説が採用されるのか。
それは、CT の入門授業の参加者のあいだで、環境に恵まれなければ批判的に考
えることもそれを口にしたり耳にしたりすることも表れないことが珍しくない、
また、切実な問題で CT が活躍するイメージがない、そういう経験と反省がとも
にされているからである。

そして、発表者は、参加者が自他の成長や CT の働く環境について考えること
も CT の重要な部分であると理解するから、個人別スキルアップの成果指向に閉
じるのではなく、自他の成長について考えること、環境への働きかけやそれら
について考えること等も含む仕方で CT の入門授業を形成することを提案する。

2 CT の目的及び CT の入門授業で学ぶことの目的について

発表者は CT に関する目的の問題を考えるのに、下のア～オを分けるが、本発
表はそれぞれを詳しく論じることとはできない。ここでは「CT の入門授業はそれ
らの目的のどれかに絞って構成されねばならないのか」という疑問だけを扱う。
【本ワークショップの中で質問を受け、この CT の目的に関しても詳しく応答し
た。わたしの返答は、同席した中川氏の目的への態度と違いを示したと思う。】

- ア 社会において共有される情報の質の向上のために （伊勢田[2005]）
- イ 科学的思考や科学リテラシーの育成のために （伊勢田（他）編[2013]）
- ウ シティズンシップ教育や民主教育のために （道田[2015]）
- エ 学ぶひと一人のために
- オ 他人との良い関係のために

- 2-1 入門授業で学ぶことにおける目的の理解（対象が一年生でも高学年でも）
- 2-2 専門教育や各種実習プログラムの一部として CT 入門がある場合
- 2-3 「目的や学ぶことの重視すべき帰結なしに」CT に取り組むことについて

3 アーギュメントに注目する CT の入門授業で重視する授業内容と実習要領

CT を学ぶひとは学校の内外でどのような CT や知とのかかわりを持って生きているか。学ぶひとにとっての CT への気の進まなさや CT の授業の難しさは、どのようなことか。CT を学ぶひとが CT を実行したい言論は、どこにあるのか。発表者はこれらのことも重視し、CT の入門授業の内容や工夫を考えている。

そこから判断すれば、つぎのように言える。すなわち、CT の入門授業では、アーギュメントに関しては、「問い-結論-根拠」を特定することができる、自発的にキーワードの明確化に取り組む、隠れている前提や推論について考える習慣がつく、時にはそれらのことのために他のひととじっくり話す。これで十分な達成である。また、下記の「学生どうしで行う、書くワーク」を、二つとも実施するのが良い。【本資料は、それぞれの実習に関する補足解説を省く。この補足解説はワークショップ時には配布レジюмеに示し、口頭で詳しく解説した。参加者も非常に関心を示してくださった部分だが、短い公開資料に適さないと判断するので、省略する。関心のある方は、拙論「クリティカルシンキング入門は、何をすることなのか（1）」を読まれるか、直接意見交換しましょう。】

実習 紙上対話（ペンネーム使用）

＊ この紙上対話の方式は、下記の本の「先生のための付録 サイレントダイアログ」から発展させた。シャロン・ケイ、ポール・トンプソン[2012]『中学生からの対話する哲学教室』、河野哲也（監訳）、玉川大学出版部

用意するものは、A3用紙1枚である。授業参加者がここで実行することは、以下の3つである。

1 最初に、著者が「著者のペンネーム」と「必ず問い（疑問文）を含む話題」を示し、意見や疑問、話題に関して気づいたこと等を詳しく記す。これによって、A3用紙の左頁がある程度埋まる。＊ペンネームの登録の機会は別にとる。

2 つぎのひとは（著者の文章が記された状態で、ランダムに配布された）用紙を受け取り、CT を生かし、それをよく読み、よく考え、「第二著者（ペンネーム）」となって、自分の意見、最初の著者の書いたことへの質問等を記す。

3 2と同様に、三人目が（二人の文章が埋まった状態で、ランダムに配布された）用紙を受け取り、「第三著者（ペンネーム）」となって意見等を記す。これによって、ひとつの「紙上対話」が完成する。

実習 著者の詳しい論述に複数人のコメント係が CT コメントを加える「ピア（同僚）による CT コメントワーク」と、著者によるリライトング

用意するものは、A3用紙1枚とステープラーである。ステープラーは、つぎのことをするために用いる。すなわち、著者は A4 用紙に詳しい論述を書いて持参する。それを、A3用紙の左半分にステープラーで止める。残りの右半分に、各コメント係はコメントを書く。複数人のコメント係がいるから、二人目からは A4 用紙にコメントを書き、それを重ねて止めていく。詳しい論述の著者は、コメントを参考に改良した論述（リライト版）を、左頁のもとの論述に重ねて止める。コメント係がここで集中的に実行することは、以下のことである。

1 アーギュメントの特定と評価の視点から吟味する。「ここが感心した」、「ここが良い」、「ここは直すほうがいい」、「ここは改良の候補だと思う」、「ここはわたしには理解しにくい」、「問いと結論が合っていない」、「この結論の根拠が見当たらない」等、できるだけ具体的にコメントする。

2 「このキーワードをもっと明確にしてほしい」、「○○という前提が（隠れて）明示されていないのが気になる」、「これはバイアスかな」、「四分割表で考えるとこの考察が抜けているのかな」等の気づきも CT の一部である。整理し、必要なことは遠慮なくコメントする。

CT を学ぶひとが CT を実行したい言論はどこにあるのか、また、CT を学ぶひとにとっての CT の授業の難しさと CT の喜びはどのようなことか

「CT、嫌な時間だ」、「取り組んでも無駄」、「わたしには無理」、「わたしはすでにできている」、「わたしにいまから初歩の CT を教えるというのか」、「CT を知っても、現実につながらない」等。これらは、CT の学校教育にあって学生が

示すよくある応答である。そして、CT はこういう知的実践である、CT の目的や CT を身につけるとできることにはこんなこともあんなこともある、たとえそれらを理解しようとも、上のような応答を示す学生は少くないだろう。

これらのことは CT に限らない。総じて、もっと良く知るということによって、生活の問題や切実な問題が解かれると信じるひとは多くない。別な言い方をすれば、「もっと良く知ること」と「生きること」につながりを見出しているひとは多くない。

他方で、もっと良く知ることや CT を実行する中で、気づきを得る、視界が広がる、これまでと他人が違って見える、理解が進む、反省する、整理がつく等、そういうことの経験で、先と同じ人達が、知ることにわくわくする思いを示すことも、たびたび見られる。

CT の入門授業に関して何をもっと良く知るべきかを考える我々は、授業を準備する時や授業の中でこうした声も聞くのが良い。CT 入門で学ぶひともたいいてい、すでに学校の内外で CT や様々な知とのかかわりを持って生きてきた。このことは重要である。そして、これらに関する皆さんの声も聞きたいと思います。

【「哲学教師でない、他の学問領域の教師から、わたしも CT を担当できると言われたら、どうするか（哲学研究者・教師としてそれは困る事態や不本意なことではないか）」という質問を受け、わたしはこう答えた。哲学にどのくらい馴染んでいるかということや専攻にかかわらず、研究に携わっている大学教員の中に CT を得意とするひとや CT に強い関心を示すひとがいるのは当然であり、好ましいことでさえある。また、わたしが現在働いている環境（医科大学の一般教育機構）ではすでにそうした異分野の CT 仲間が数名おり、さらに、臨床実習や高学年の医学教育の中での共同作業も始めたところである。これに関して、日本哲学会会員にはさまざまな意見があるだろうと想像するが、わたしはしばらく、そうした経験も生かした CT や CT 入門授業をも積極的に作っていく。】

【「哲学を専攻し、哲学史研究を経ていまに至るあなたが CT の授業を行うに際して、自分が経験した哲学教育等の何が生きていると思うか」という質問には、特にひとつということであれば「哲学の読書会やゼミ」の経験であると答えた。

また、この質問への返答ではなかったと記憶しているが、教わった学の体系の中だけでなく生活や市中で哲学することにかかわってきたからこそ、また、学生との対話からひとつひとつ自前の教材を作ることによってかかわってきたからこそ、わたしはこういう CT を重視しているということは言うてよいと思う、そういう話もした。これに関しても、他の会員諸氏には別な考えがあると思う。今後もいろいろそうした話を聞き、引き続き考えていきたいと思っている。】

注

1 日本の学校生活でよく見られる学生の CT への消極性について、CT を得意とするひとは「すごい人だけど、友達にはなりたくない」（楠見（他）編[2011], p.47）という心理に注目することや、日本の学校では「社会的 CT」を重視するのはどうかという提案は、以下の文献にある。元吉忠寛[2011]「批判的思考の社会的側面——批判的思考と他者の存在」, 楠見（他）編[2011], pp.45-65

参考文献

- 伊勢田哲治[2005]『哲学思考トレーニング』, 筑摩書房
- 伊勢田哲治, 戸田山和久, 調麻佐志, 村上祐子（編）[2013]『科学技術をよく考える——クリティカルシンキング練習帳』, 名古屋大学出版会
- 菊地建至[2015]「学生と教員が道徳的に考える機会や場を作り続けるために」, 関西倫理学会『倫理学研究』第 45 号, pp.31-41
- 楠見孝, 子安増生, 道田泰司（編）[2011]『批判的思考力を育む——学士力と社会人基礎力の基盤形成』, 有斐閣
- 楠見孝, 道田泰司（編）[2015]『ワードマップ 批判的思考——21 世紀を生きぬくりテラシーの基盤』, 新曜社
- 戸田山和久[2012]『新版 論文の教室——レポートから卒論まで』, NHK 出版
- 道田泰司[2013]「批判的思考教育の展望」, 日本教育心理学会『教育心理学年報』第 52 集, pp.128-39
- 道田泰司[2015]「社会科教育/市民性教育/平和教育——多面的に考え, 公正に判断する」, 楠見・道田（編）[2015], pp.140-5
- Weston, A. [2009], *A Rulebook for Arguments*, 4th edition, Indianapolis.

★本発表は、拙論「クリティカルシンキング入門は、何をする事なのか(1)」、金沢医科大学『教養論文集』第43巻(平成27年)、pp.29-49を元に行っている。現在、これは紙でしか読めませんが、インターネットからダウンロードできるように準備中です。急ぐ方は、菊地宛にご連絡ください。

菊地建至(金沢医科大学[人文科学]、「探Q 複数の視点で考えるカフェ」)
連絡先 takek@kanazawa-med.ac.jp